「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第 6 回（11 月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

桜の下で微笑む日本の少女

天津市　劉暁秋

昨晩は桜の夢を見た。嬉しくなるような満開だった。しかし、目が覚めて、夢だったことに気づいた。千里を思い出し、しばらく寝付けなくなった。

荒川千里は、私が大分大学に留学していた時のチューターだった。大分大学は留学生一人一人にチューターをつけ、日本での生活や学習などの相談相手にしてくれていた。日本の学生と留学生との交流促進にもなっていた。私は初めて「荒川千里」という名前を見た時、荒涼とした名前なので男子学生だと思っていた。本人に会ってみると、やせ形で、細長くて優しい眉と目をしていて、長い髪を耳元で束ね、美人でこそないが繊細で、見ていて気分のよくなる少女だった。

彼女は、私を連れて行って、必要な手続きを全てやってくれた。彼女との交流がやや面倒だったことは認めざるを得ない。私は日本語があまりできず、千里の英語も特にうまくはない上、日本人独特の発音だった。幸い漢字が使えたので、当初は主に筆談で交流することになった。彼女はごくまじめに、少なくとも週に 1 回は一緒にご飯を食べ、2 週間に 1 回は指導教官に会うのだと教えてくれた。生活や学習で困ったことがあったらいつでも呼んでよいということだった。キャンパス内に桜の木があるかと聞くと、彼女はちょっと笑って瞬きをして見せた。「桜の季節になったら分かるよ！」

こうして私は秋の学期を通して彼女と接していたが、基本的には彼女が私の宿題を手伝ってくれるというのが主旨だった。彼女には、指導教官に会いに行けとしょっちゅう言われたが、彼の名前の日本語読みを覚えていなかったので気が進まなかった。いつも千里が私を先生の部屋に連れて行き、入室前に先生の名前を教えてくれた。退室する時には「失礼しました」と言うように注意してくれていた。幸いなことに、先生方がとても親切で、味気ないものもイメージを膨らませて生き生きと表現してくれた。そして、熱心な先生方の影響で、日本での 1 年間に、教壇に立つのは崇高で楽しいことだと思うようになり、将来いい先生になろうと密かに決心した。これは、師範大学で勉強した 2 年間にはなかった決心である。

千里は何度か私の部屋で遊びたいと言ってきたが、私は毎回はぐらかしていた。日本人とはあまり親密に付き合いたくなかったのだ。むしろこれはある種の民族間の深い隔たりで、彼らを好きになるのが怖かったと言うべきかもしれない。それぞれ皆さんが良くしてくれても、結局のところ私の留学はたった 1 年で、彼らとの縁も 1 年しかない。私は、そういう浅い思いが幾千里を越えて着地点を探すようなことをしたくなかったのだ。彼女はきっと少し失望しただろうと思う。

元旦に千里から年賀状が届いた。新学期には私のチューターをしないかもしれないとのことだった。彼女は私と知り合うまで、チューターがちゃんと務まるか心配だったという。外国の友人は私が初めてで、私と遊びに行く計画をたくさん立てたが実現できなかったため、彼女は自分がだめだったと感じていたようだ。

私が参加したいと思わなかったことがこういう結果になるとは、私も思っていなかった。実際、人の生命も数十年しかない。永遠などどこで探せるものだろうか。1 年もあれば十分だった。ある人と知り合い、理解して、受け入れ、共通の記憶を持って、そして一生の思い出にするのも生活の恵みなのだろうか。私は千里にチューターを続けてほしい、寮にも遊びにおいでとショートメールを送った。

日は飛ぶように速く過ぎ、千里は私の寮の常連になった。彼女は私の作る卵トマト炒めが好きで、何度も私の作り方を細かく観察して試したが、それほど美味しくできないのだと言っていた。私達はグランドキャニオンへ遊

びに行き、街をぶらついて、プリクラ写真を撮った。瞬く間に桜の季節が訪れ、キャンパスで色々な桜を楽しんだ。千里が満開の桜の下で私に手を振った時、一見か弱いこの女子学生がこれほど感動させてくれるとは、と急に思った。

帰国する時、思いがけず千里が福岡空港まで見送りに来てくれた。大分からの交通費は往復で 6000 円程かかる。千里は大分大学には珍しく、車を持っていない学生だった。車がないのであちこち遊びに連れて行ってあげられないね、と何度も後ろめたそうにしていたものだ。彼女は自分の生活費をアルバイトで賄っていたので大変だった。なので、彼女が送ってくれるとは意外だった。荷物は自分で何とかするから大丈夫だよと話したが、それでも送りたいと言うのだ。

保安検査場にさしかかると、千里は気詰まったようにさよならと言いかけ、ついには勇気をふるって私に抱きついた。私は肩を叩いて、お金が貯まったらきっと日本に遊びに来るからと言った。飛行機に乗ってから見てほしい、と彼女が何か袋をよこした。私は振り返らず中へ進んだ。この 1 年のすばらしい時間はもう後ろにしかない。

搭乗後、千里にもらった袋を開けると、和服を着た熊が入っていた。そしてアルバム。知り合ってから別れるまでほとんど毎回、遊びに行くたび撮っていた写真が詰まっていた。写真はどれもきらきらした星などの小さなステッカーで飾られていた。どの写真にも、その時々の彼女の気持ちが写っていた。こらえきれず、涙が流れた。

それから毎年、桜の季節になると、あの満開の桜の下で微笑む少女がとても懐かしくなる。